
孔雀館の殺人

小向遥介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孔雀館の殺人

【Nコード】

N0246D

【作者名】

小向遥介

【あらすじ】

関東の海に浮かぶ孤島の館に、やがてオープンするペンションのモニターとして集まった十三人に管理人や使用人含む三人。そこで起きる不可能殺人、不可解な殺人。犯人は誰なのか。真相は何なのか。多分不定期更新になります。「小説家になろう」秘密基地」で、「小向遥介」の名前で孔雀館の平面図や全体像等を載せています。お手数ですが、物語の進行上絶対に必要だと思しますので、必ずご覧になってからこの小説を閲覧して下さい。

登場人物紹介（前書き）

イラストコーナーの孔雀館の画像が見れない！という声がありましたので、もし見つからなかった場合は、非常に厚かましいのですが、ヤフーで「小向遥介」とかけていただければ必ず見れるはずですが、この小説にはルビ（ふりがな）が多用されているので、携帯よりもパソコンで見た方がいいかもしれません。

登場人物紹介

* 主な登場人物 *

くらかけりゅうと
倉掛柳人…大学生（20）
あかいしなおり
赤石直美…同大学生（20）
きりとみよしあき
希利富義昭…骨董商（34）
いいたさとし
飯田智…大学生（20）
かわのあきな
河野秋菜…同大学生（19）
かんざきなおり
神崎直樹…株式会社「フーズ」の社員（38）
しまりょうへい
志馬良平…株式会社「明尊社」の社員（37）
さえきまさたか
佐伯正高…株式会社「古谷建設」の社員（47）
さえききよこ
佐伯清子…その妻（47）
いぬやま
犬山さつき…女子大生（21）
またみれい
真民令…同女子大生（22）
かわらやしんぞう
瓦谷晋蔵…退職者（67）
たにくちまなぶ
谷口学…フリーライター（29）

たがわはるふみ
多川晴文…孔雀館の管理人（33）
こせきけんじ
瑚関健二…孔雀館の使用人（45）
かどつあのん
加藤野阿音…孔雀館の使用人（18）

まきむらじょうへい
牧村尚平…株式会社「古谷建設」の社員（45）

* その他の団体等 *

りおうだいがく
・理欧大学…倉掛と赤石の通う大学。神奈川県横浜市に建つ歴史のある大学。67強の偏差値を誇る有名校。
はまつわかくさだいがく
・浜松若草大学…飯田と河野の通う大学。静岡県浜松市に建つ大学。

偏差値は58前後。

たかみがはらしょしだいがく

・ 高見ヶ原女子大学… 犬山と真民の通う女子大。埼玉県さいたま市にある。テニスが強いことで有名。

・ 株式会社「フーズ」… 誰もが知る大企業。薬品や電化製品を中心にマーケットを開拓している。しかし犯罪すれすれの商売方法に好感が持てない人も多く、色々な悪い噂も都市伝説のようにまことしやかに流されている。

・ 株式会社「明尊社」… 印刷業を主軸に経営を進める中堅企業。特に中学受験用の問題集や地方情報誌等にはめっぽう強い。

・ 株式会社「古谷建設」… 今回直接的に孔雀館を建設した中小企業。40年の歴史を持つ老舗会社である。

プロローグ（１）——事件報告——

二〇〇X年八月十九日、月曜日。

関東の海に浮かぶあるちっぽけな孤島で、凄惨な連続殺人事件が起った。

島に建てられた、オープンを目前に控えたペンション——というよりは「館」か——にモニターとして招待されていた十三人の人間と、管理人や使用人含む三人の、合計十六人。

滞在期間を過ぎても島から戻ってこない人間に不審を感じた関係者が警察に通報し、踏み込んだ時には既に——。

玄関に倒れる二つの死体。背中と腹、それぞれに刺殺された痕があり、服にはどす黒い染みが広がっていた。

更に二階の廊下にも一つの刺殺体。この死体も同じような惨状になっていた。

そして、客人が泊まる各部屋には……刺殺体に留まらず、首を吊つて息絶えている死体や撲殺された痕のある死体、更には身体中縄で縛られてから刺されたと見られる死体もあった。通算九体だ。

さて、残りの四体は——食堂である。外からは鍵を掛けられていた二階まで吹き抜けのこの食堂には、テーブルの上にナイフの刺さった刺殺体が一体、奥の厨房に三体。惨状は……いや、ここでは割愛しよう。いずれ、わかる。

結局のところ、そんな手遅れの状態の孤島へ今更のように踏み込んだ警察には、いくら最先端の科学技術を駆使しようとも、真相は全

くわからず、口を利ける一人の人間もいないこの死の館で立ち往生しているしかなかったのである。

——前振りはこのところだろうか。これからあなたには、そんな迷宮入りの怪事件、後に「孔雀の狂気」と呼ばれることになるこの難事件の一部始終を見ていただくと思う。先に結末を云ってしまうと、果たして探偵役である筈の主人公は謎を解くことが出来ずに、自らも憐れな被害者の一人となりおおせてしまうのだ。

だが、心配するなかれ、あなたはことの真相を目の当たりにすることが出来る。どういった方法で、かは読み進んでいけば明らかにされるだろう。

さて、そろそろ物語を始めようか。

因みにこの物語の真相を掴み取るには、二回、この「物語」を読む必要がある。というのは、作者がこの物語を二部構成の複数主人公型にする予定だからである。第一部は「問題篇」、即ち正規の主人公視点で描かれるストーリーとなっていて、これで物語の流れを掴んで頂き、第二部の「解答篇」で、ある人物（犯人とは限らない）の視点で真相が知らされていく、という構造になる予定なのだ。くどいかもしれないが、作者はこの描き方をとらせて頂くつもりである。

ブローグ（1）―事件報告―（後書き）

何だか本文では偉そうなこと書いてますが、その、空気でそうして
しまっただけなので、ご理解いただけるとほっとします…。

プロローグ（２）——九条島の手毬歌——

紅い孔雀が啼けば、村の娘の手足がもげる
蒼い孔雀が啼けば、村の男の身体浮く
臙脂の孔雀が啼けば、村の男は宙を彷徨う
浅葱の孔雀が啼けば、二人は永遠の仲を絶つ
緋色の孔雀が啼けば、村の長老の胸が抉れる
群青の孔雀が啼けば、村の詐欺師は息の根止める
六つの孔雀が啼けば、皆々神様に成る

第1部、第1話：孔雀館へ

「わー！ 風が気持ちいいわよ、柳人！」

船の甲板から身を乗り出して、赤石直美は云った。

海風が直美の肩に掛かるくらいのシヨートヘアをさらさらと揺らす。
「うん。そうだね」

僕は海面を照らす眩しい陽射しに目を細め、そう頷いた。――実はさつきからずっと酔っているのだが、直美には気付かれないように振舞っている。

僕は昔から船だけは駄目で、できる限り避けていた。この、波に合わせて地面が揺れ動くような感触がたまらなく嫌だった。中学の卒業旅行で行った沖縄。帰りの船で、馬鹿食いしたちんすこうを全て海へとリバーズしてしまった。あれは一生に一度の大失敗だった。

まあ、今回は仕方ない。なんたつて直美からの誘いなのだ。

『ねえ、これ。一緒に行つて見ない？』

1ヶ月前、サークルの活動前に突然そんな風に誘われ、彼女に少なからず好意を抱いていた僕は、後先考えずにOKの返事をしてしまった。

彼女の言う『これ』とは、あるちっぽけな孤島に建てられた館（後に小ホテルだかペンションだかにするらしい）のモニター参加券だった。それも二枚。

彼女が言うには、その館のオーナーが開業前に宿泊客の反応を見たい、とのことで関係者の知り合いを集めて無料で五日間泊めてくれるらしい。

『私の伯父さんがこの企画の関係者らしくて……。何でも二人の方がいいんじゃないかって言うから』

小ホテル？ペンション？

——後から聞くとところによると、その時の僕の表情は、直美曰く『大金塊を見つけた悪の大魔王』と化していたらしい。うーむ、恥ずかしながら、実能的を得ている……。

直美は、友人でもなく家族でもなく……この僕を誘ってくれた。それは、彼女に想いを寄せる一人の男を有頂天にさせるには充分過ぎる程のトピックス、いやミラクルだったのだ。

実際、あの時の浮かれた自分は、『伯父さん』の助言も彼女の方便かと思っただけくらいだ。

まあ、参加人数は出来るだけ多い方がいいってことかな、と一応僕の理性はそう判断する。

「……え。ちょ、ちょっと柳人、大丈夫？顔真つ青よ？」

黒髪を風になびかし、爽やかオーラ全開の直美が僕の異変に気付き、僕の背中をさする。

「うん。大丈夫ダイジョブ。な…なんくるないさー」

「……え？」

ああマズい。

あの時の琉球の風を思い出す。何しろ、あれから船に乗ったのは今回が初めてなのだ。五年のブランク、もとい一生消えることのないトラウマは、いつまでも僕の身体に付き纏った。

因みに直美とは高校からの付き合いなので、僕の卒業旅行での惨劇を知らないのだった。

段々陸が近づいてきた。

こじんまりとした孤島——九条島。くじょうじま

この船が着くであろう場所と正反対の方の島の先端には、僕達がこれから泊まる館がそびえ立っている。

まあ、「そびえ立つ」と描写される程背の高い建物ではない。どちらかというところ、ずんぐりむっくりしたイメージがある。

それというのも、この館の「特殊な形」のせいだろう。

まるで大文字焼きのような形状の、二階建ての館（一階は玄関と受付、ロビーを同居させた部分が「大」の字の股辺りにあるので「木」の字のようにも見える）。建てたばかりの筈なのに、オーナーの趣味なのか、外装は古ぼけた洋館を連想させる煉瓦造りの、臙脂色を基調とした色使いとなっている。それが人間の匂いのしない孤島の色合いと重なって、何とも言えない神秘的な雰囲気醸し出している。

「……何だか、神秘的だね」

陸が刻々と近づいてくることで、多少調子が良くなってきた僕は、館を見つめてそう呟いた。

「伯父さんの話によると、あの館は九条島に伝わる言い伝えを元に造られたらしいわよ？」

「言い伝え？」

「うん。九条島に語り継がれてきた手毬歌、その主題となっている『孔雀』の羽をモチーフに館をあの形にしたんだとか……」

——ザ、ザザ……

……ザアアアアアア——

唐突に、何か、とてもいやな予感が、不快な感触で僕の神経を撫ぜた。——何だ？

「へええ……孔雀、の……」

「詳しくは私も知らないんだけど……九条島では、孔雀は神聖なものとされていて、崇められてるらしいの」

「ふ、ふーん……」

ぎこちなく頬に笑みを浮かべる。

風が吹いた。さっきまでは爽やかだったそれも、なんだか生暖かい嫌な風だな、と感じた。

「でもその手毬歌、確か…少し歌詞がおかしくて——」

「…おかしい？」

「うん。なんだっけなあ……、私も忘れちゃったけど」

「そんなのあるかよ。気になるじゃん……」

さつき感じた得体のしれない悪寒が僕の声色を冗談に聞こえないものにさせてしまった。台詞を言い終えてからそれに気付いて、慌てて言葉を繋げた。

「ま、まあ、昔の話はおめでたい話にも残酷性なんかが含まれてたらしいから、それもその類なんだろうね」

「うん、多分ね。——そういえば、情報社会のレポート終わった？」

『近年のゴミ社会について』」

「い、いや、まだ手をつけてもないよ。あんなのグーグルで調べれば一発だと思ったんだけど、中々上手くいなくてね……」

上手く（自覚はないんだろうけど）話題転換をしてくれた彼女に話を繋げる。だが、台詞があまりにも適当過ぎていたらしく、僕の言葉に彼女はアメリカ人のように肩をすくめて呆れ返った。

「そんなの当ったり前じゃない！そんな宿題、西岡教授が出す訳ないでしょ！」

西岡教授——この名前が出て、僕はまたほのかな酔いを感じてしまった。

西岡教授は現代社会の先生であり、僕等生徒の天敵でもある。つるりと禿げ上がった頭は脂ぎっていて、口臭の酷いタラコ唇から発せられる言葉はただ一つ——『君達、イキがってんじゃないよお！』だ。何故か『イキがってんじゃないよお』の『キがつ』と『ない』の部分にアクセントが置かれていて、何ともヒステリックな発音をする。この大学出身の先生がこの母校に赴任した時、挨拶でこの西

岡教授の口癖を真似て、それに周りの先生達が慌ててフォローしたことは、大学では永久保存版ネタだ。

——話が逸れた。

つまりは、僕達は島に着くまで「孔雀伝説」のことも忘れて和氣あいあいと話をしていた、ということだ。

時刻は午後三時半——。

この夏の陽の長さのせいで「昼」を感じていられるぎりぎりの時間帯だった——。

陸に着くと、船着き場では一人の男が直立不動の姿勢で僕達を待っていてくれた。

紫のスーツの下には白いワイシャツ、ネクタイの色は濃いめの、原色に近い赤。ズボンもスーツと同じく紫で揃えている。髪の毛はポマードでべったりと七三に分けていて、その頭の下では、あからさまに人為的な（本人にその気はないのだろう、性格や元の顔の造りが災いしてそう見せているのだろう）笑顔で今か今かと新たな客を待ち構えている。

僕等が船から降りると、そのファッションセンスのあまりなさそうな男がすつと傍にやってきた。

「ようこそ九条島へ。私はツアーの現地管理人の多川と申します、以後御見知りおきを」

そう言つて男——多川さんは二枚の名刺を胸ポケットから取り出した。

「こちらこそ。——僕達は招待客の倉掛柳人と赤石直美です」

直美がいる手前、ちよつとカツコつけようとしたが、言ってから、招待客であることは言わなくてもわかってたか、と軽く舌打ちした。

多川さんの進む道をちよこちよこ僕達についていった。船着き場から館までは一本道という訳ではないらしく、林の中に作られた白い固まった土の道はたまに二つ三つに分かれていた。くねくねと曲がりくねっていて先が見えない道もあるが、ほぼ一直線に延びている道もある。その道の先に見えたのは――小さいドーム状の建物、その屋根には独特な形をした「ピン」が垂直に立っている。…ボウリング場だ。

ということは、この枝分かれした道の先には色々な娯楽施設が宿泊客を待ち構えている、ということだろうか。そうすると、この島は僕が想像していた「人間の手の加えられていない無人島」というものとは少し違う感じのものであるらしい。

――と、僕達の歩く道から少し外れた道の先に二つの人影が見えた。……宿泊者だろうか？

僕が軽くそんなことを考えていると、多川さんが僕の視線の先にあるものを見て、そういえば、と思い出すように云った。

「お客様が本日の十人目、十一人目のお客様でございます。もう館にはほとんどの宿泊者が来られておりますが、皆七時までは自由時間とさせていただいております。館には娯楽室や図書室もございますのでそこでおくつろぎになられても結構ですし、島の随所にも様々な娯楽施設をご用意させていただいておりますので、ただ今外に出られているお客様もいらっしやいます。先程あの脇道にいらっしやったのは真民令様と犬山さつき様でございます」

「へえ。それじゃ、僕達も館に着いてから三時間くらいはフリーなんだ」

「そつみたいね。……島を散歩するのもいいけど、宿泊客の人達と話すのもいいかもね」

直美は考え考え云った。——そうだ、直美はいつも人との交流を何よりも好む。おかげで僕は直美にいつ変な虫が付かないかとらはらしているのだ。

そして、僕も直美程じゃないが人との交流を好む。だが、語彙の貧困な僕の口からは、上手い言葉がはいはいと飛び出てくる訳でもない。無い頭をフル回転させて無難な言葉を探し当て、無難に会話をしている。だが、どういうわけか仲間内からは「暴走機関車」の名を頂戴している。あれは確かこの前の酒の席からだ。僕が彼等に何かしたのだろうか。

一日の内で一番暑い時間は最早過ぎ去っていたが、体中、とくに頭からとめどなく溢れ出る汗の量は全く変わらない。むしろ船に乗っていた時の方が風が当たって涼しかった。首筋を伝う汗が殊更気持ち悪い。それは直美も同じらしく、僕と話しながら、時々思い出したように黒髪を除けて首筋に手を当てている。……少しも着崩すことなくスーツを涼しい顔で着こなす多川の気がしれない。

島全体に、娯楽用の人口物がいくつか建てられているが、それ以外は全くと言っていい程に自然だった。生い茂る木々、島を流れる細い川。ぼくは孤島気分を満喫した。

しばらくして――。

「――……あっ」

僕と、いつの間にか会話に加わっていた多川さんとの話の途中で、唐突に直美が声を上げた。

「え……？……ああ……」

直美が指差す方にあるものを認めて、僕はため息ともとれる感嘆の声を漏らした。

僕等が歩いてきた道は、全て微弱な上り坂になっていた。そして、この島のとっぺん――道を上り切ったところに、「それ」はあった。まるで朽ち果てた要塞のような、威厳。まるで横たわった人手のよ

うな、自然感。

この島の主であるかのような存在感をたたえて、孔雀館は僕等の前に待ち構えていた。

第2話：宿泊客達（前書き）

「小説家になろう」秘密基地」で、「小向遥介」の名前で孔雀館の平面図や全体像等を載せています。お手数ですが、物語の進行上絶対に必要だと思しますので、必ずご覧になってからこの小説を閲覧して下さい（特に今回から）。

第2話：宿泊客達

観音開きのドアを開けると、まず視界に入ってきたのは、淡いクリーム色のコンクリートで造られている、カウンターと思しき小さなスペースだった。その色のせいか、正面にコンクリートで囲われたスペースがあっても狭苦しくは感じない。むしろ手前に置かれたかわいらしい熊のぬいぐるみ等に目を惹かれる。

正面のガラス越しに、カウンターの中の奥の壁に雑多な貼紙がしているのがわかる。色々な書類なのだろう。ただし、今の中には誰もいない。本来客を応対すべき人間が多川さんなのだろう。

そのカウンターの斜め奥がロビーになっているらしい。外見を裏切らない小洒落た古い西洋風の造りになっている。壁にちりばめられた調度品の一つひとつにも風情を感じる。しかし飾りだらけでこたごたしている訳ではなく、実際あまり広くないこの部屋を有効に使っている。

この玄関とカウンターを備えたロビーには、小さなアンティークの数々やインテリアを除けばガラスで出来た背の低い大きなテーブルとそれを囲むように置かれた白い布のソファだけがある。

——と。

「いらっしやいませ、孔雀館へようこそ」

木製のお盆を小脇に、使用人と思しき一人の女性——というより少女と云った方がいいかもしれない——が、僕等の前に来て、深々とお辞儀をした。

あくまでも無表情に、無感動に彼女は云うのだが、顔にはまだ少女のようなあどけなさが残っていて、不思議と無愛想な印象は受けない。

どこことなく西洋人を思わせる整った顔立ちをしていて、それがすらっとした黒いスーツとその上に着た白エプロンととても合っている。

メイド服、という訳ではなさそうだが、色合い等それに近いものを感じさせる。

僕と直美が軽く会釈をすると、ドアを閉めた多川さんが彼女を指して、ぎこちない笑顔で——本人は満面の笑みのつもりなのだろう——紹介を始めた。

「彼女は孔雀館の使用人の加藤野です。まだ若くて成人もしておりませんが、どうぞ使ってやって下さい」

そう多川が云うと、彼女——加藤野さん——は、無表情に礼をした。漆黒のストレートヘアーが肩に乗っかる。今までに髪いじりをしたことのなさそうなさらさらの黒髪だ。

状況説明の順番は前後するが、ガラスのテーブルには四つのコップが置かれている。中身は氷の沢山入ったアイスコーヒである。コップに付いた水滴が飲欲をそそる。そしてその各々のコップの前では四人の男女がソファに腰掛けている。

一人は、オレンジのシャツにはぼ黒に近い深緑の長ズボンの、剃無し眼鏡に細い垂れ目で人のよさそうな三十代半ばくらいの男性。にこにこ、という擬音が聞こえるくらいの笑顔で話をしている。

さらにその横には日焼けした髭面の、がたいのいい男性が座っている。膝までのボロボロのジーパンに薄ピンクの生地のパロシャツ、髪はざんばらで、ハードボイルド調の、もっと身近な例えで云うならサーファードのような風貌の男性である。さつきから四人での会話の主導者なのか、しきりに三人に話し掛けている。

その向かいには少し腹の出た温和そうな中年の男性。若草色の薄手のカーディガンに、白いシャツを着ている。スポンはベージュの七分丈だ。その隣、つまり剃無し眼鏡の男性の向かいに座っているのが、その温和そうな男性の妻なのだろうか、長い髪を結わかずにはっきりと下ろしたロングヘアー。濃紺の、薄い生地の手シャツにカーテンのような白いロングスカート。少しつり上がり気味の目に笑みをたたえてサーファード風の男性に話し掛けている。

僕等二人が所在無さげに視線を宙に漂わせていると、その内の一人――瀏無し眼鏡の男性があつ、と声を上げた。

「やあ、新客だ。こんにちは、お二人さん」

「どうも……」

僕が会釈を返すと、彼はにこりと目を細めた。この会話で、テーブルにいた他の三人も視線をこちらに向けた。

「僕は希利富。今日は一人で来たんだ、よければ相手してくれよ」

「……倉掛つて云います。倉掛柳人。よろしく願ひします」

僕がそう云つて軽く頭を下げると、彼――希利富さんはほがらかに笑つた。

「あつはつは！そんなに改まらなくてもいいよ。折角の旅行なんだから、もっと伸びやかにいかなきゃ」

「あ……は、はあ……」

中々希利富さんのペースについていけない。

と、希利富さんの隣のサーファー風の男性がこちらに顔を向け、目が合うとにやつと口の端を歪めて自己紹介を始めた。

「よう。俺は谷口学、フリーライターだ。今回ここへは取材で来てるから、インタビュー、よろしくな、柳人君。それと、ええと――」

「直美です。赤石直美」

「そうか、よろしくな、直美ちゃん」

にやりと笑うサーファー風の男性――谷口さん。成る程、と僕は一人納得した。さっきからこのテーブルでは谷口さんが三人にインタビューしていたのか。

そして僕はすかさず直美の表情を盗み見る。――大丈夫だ、この男達に心をときめかせている様子はない。

「私は佐伯と云います。こちらは妻の清子。五日間、よろしく願ひします」

ふくよかな体型の男性――佐伯さんも自己紹介をする。希利富さんとはまた違つた赴きの、落ち着いた笑顔だ。見たところ子供はいな

さそうだが、それでも温和に笑う佐伯さんは「いいお父さん」の鏡だ、と形容するのがぴったりだ。

それとは逆に、細身の妻、清子さんは少し神経質そうだ。

「じゃあ君達にも早速インタビュー、受けてもらおうかな」

谷口さんが僕等をソファに座るように促す。――そういえば、さつきから取材をしているという割にはテーブルの上には筆記用具なんかがない。録音でもしているのだろうか……？

僕等がソファに座ろうとしたところ、おずおずと多川さんが声を掛けた。

「申し訳ございません、倉掛様、赤石様。とりあえずお部屋をご紹介しますたいのですが……」

そういえばそうだった。

じゃあまた後で、と僕等は一旦ロビーを離れ、自室へ向かうことになった。

ロビーを抜けると、真正面に臙脂色の大きな二枚の壁が見えた。正面を頂点に、大体百二十度くらいの角度で角を成している。それぞれの面に大きめのドアが一つずつ付いている。

その左横の廊下を、多川さんは進んでいく。

「あの…ここは…？」

気になって僕は尋ねてみた。

「そこは食堂でございます。この建物自体の中心にあり、全体的に正六角形をしておりますが、うち一角――ロビーから一番遠い場所には厨房があるので、外見は六角形ですが、中から見れば五角形に

なります」

「……？」

そう云われても何が何だかわからなかったので、左手前のドアから中に入らせてもらった。

真ん中に、白いテーブルクロスが掛かった大きな横長テーブルが置かれている。そして僕等の今いる位置からテーブルを挟んだ反対側の端には煉瓦作りの暖炉があった。本物だろうか。

ロビーや廊下には天井があつたが、ここは吹き抜けになっていて、二階には床をくり抜いた周りに西洋の城にでもありそうな木製の手摺りが設けられている。さらにその上——この建物自体の天井は食堂の天井部分だけが硝子張りになっていて、外から、さんざん僕等の水分を搾り取った太陽がさんと輝いている。——成る程、こうして見る分には悪くない、と調子よく思った。

入ってきたドアの一枚奥の壁のドアから出る。と、左右に別れる道とは別に、そこから一本廊下が延びていて、突き当たりにドアがある。

「そこは物置でございます。お二人の部屋は二階にございます」
そう云つて物置へ続く廊下の右手前にある階段を上つていく。

二階に上がる。中央には食堂の吹き抜けが、そしてその輪郭に沿つて高級そうな木製の手摺りがある。多川さんは手摺りを周つて、一階と重ねて見るとロビーの左隣に位置する廊下まで来た。そこを進むと、突き当たりには三枚のドアがあつた。それぞれ床から二メートルくらいの位置に、左のドアから「10」「11」「12」と金文字で書かれている。

「では倉掛様は11号室、赤石様は12号室にお泊り下さい。ルームキーも今お渡ししておきます」

多川さんは僕等に、番号が頭の部分にプリントされた鍵を渡した。

「10号室には、誰が…？」

もし俳優の「速水もこきち」のようなイケメンだったらどうしよう……。僕は不安になって多川さんを見上げた。

「希利富様がおられます」

希利富さん……。あのふわふわした感じの陽気な男性。その彼の隣に直美とは……。僕は初対面の希利富さん相手に、知らない心配を始める。

「では、ごゆっくり。館内にいらっしゃっても島の外にお出かけになるのも結構ですが、午後七時の食堂集合には間に合いますよう」そう云い残して多川さんは階段を下りていった。

「……とりあえず、部屋に荷物置いて、ロビーに行こうか」

「そうね。——ああ、何だかわくわくしてきた」

直美はジェットコースターに乗る列に列ぶ子供のようにそわそわしながら、鍵を挿し込んで部屋に入っていた。

さて、僕も疲れたことだし、少し休むかな——。

僕は鍵を挿し込んで、ドアを開いた——。

第3話：宿泊客達2

「ふうあー……。……疲れたあー」

年甲斐もなく僕は、ホテルやペンションには必ずと云っていい程ある、お約束的なふかふかのベッドにダイブした。

ぎし、と軽くベッドが軋む。このまま身体から疲れを一気にベッドの底に沈めてしまいたい気分だった。何だか僕の体重が、疲れによって二十キロくらいは増量されている気がするのだ。しばらく——と云っても直美と下へ行く約束があるので三分弱くらいだが——僕はこのふかふかベッドの恩恵に与ることにした。

実は、直美との初めてのこの旅行、少々はしゃぎ過ぎた面があるのだ。まるで遠足前夜の小学生さながらに、興奮しっぱなしで眠れず、十一時には寝る予定が二、三時くらいまで続々と体内から溢れ出るアドレナリンと格闘していた。……いやはや、情けない。

僕は携帯を開いてディスプレイを見た。——十六時九分、もとい午後四時九分。電波は、圏外になっている。折角のリゾート地なのに勿体ないなあ、と思った。

この部屋の造りは、ドアを開けたすぐ右手に申し訳程度のクローゼット、左手にはトイレとバスが一つになったバスルーム。奥には大きめのふかふかベッドが二つ。その向かいには小さな机、部屋の隅には僕の背丈くらいの観葉植物の植えられた植木鉢。……一つひとつが飾らない高級感に溢れている。

これ全てを堪能するのに無料とは——。今更ながらに、僕は自分の置かれた身分を再認識するのだった。

部屋を出ると、僕は直美のドアをノックした。

「直美。準備出来た？」

……しばらく応答が帰ってこない。

もう一度ドアをコンコンコンと叩き、呼び掛けると、入ってきて、と予想外の返答を受けた。

金色のノブを回す。と、ワンテンポ遅れてかちゃ、という音がした。直美が鍵を開けたのだろう。

「どうした？」

ドアを開けた先には——誰もいない。

バス・トイレを除いて考えると、各々の部屋は皆一様にアルファベットの『q』の周りを象ったような造りをしている。云々までもなく『q』の右下——先端部分が廊下に繋がるドアで、その左横、つまり『q』の枠外にはバスルームがある。

今、おそらく直美は『q』の左上にいる為に死角となっていてここからだと見えないのだろう。

「ん？…直美？」

直美が何をしたいのかがわからず、戸惑いながら数歩進む。——と。

「え……うわっ…ああ…」

「『うわっ』はないでしょ。失礼ね」

顔を赤らめながら、部屋の奥にもじもじしながら佇んでいた直美は云った。

——可愛い。

僕は馬鹿みたいにはかんと口を開けて、ただそう思った。

直美は、さっきまでは薄い黄色のタンクトップにベージュのショートパンツという出で立ちだったのだが、今は——。

白地に目立ち過ぎない程度に点々と黄色い花びらの模様の入った、ワンピースだった。

最早恋の病に陥っている僕の眼から、客観的に直美の容姿を説明す

ることは不可能だ。申し訳ないが、僕には思い付く限りの贅辞の言葉を述べることにしか出来ない。女優の「戸田恵理子」や「長崎まさみ」にも全然負けてない！

さらに白いワンピースが眩しささえ感じさせる。もう僕にとって直美は太陽だ、女神だ、宇宙だ！

「……うと。柳人。…あの……感想は……？」

はっと我にかえると、直美は頬を朱に染めて僕の眼を一直線に見ていた。

「……っ……」

思わず言葉を詰まらせてしまう。実際可愛いと思っているのだからそのままを云えばいいのだが、何故かどうしても云えない。それは多分僕が直美のことが本気で好きだからなのだろうが、いくらなんでも初恋の中学生ではあるまいし、それはないだろう、と自分でもよく思う。

まあ、つまりはこういった場面が苦手なのだ。

「い……いやあの……き、きれ——」

「——っく。あっはははははは！」

——え？

僕は驚いて突然笑い転げ始めた直美を見つめた。

「何よー、そんなに上がったちゃって」

にやにやと僕の顔を見て、そんなことを云う。初めは何のことからなかったが、直美がそんなに笑う理由がわかり、途端に僕の顔は湯気が出る程朱くなっていった。

「——芝居……？」

恥ずかしさではち切れそうな僕にはそれだけを云うのが精一杯だった。

そつだ。直美はこんなことで朱くなるようなやつじゃない。

「もう。あたふたしちゃって」

そうやってひとしきり直美が笑い転げ、僕は赤面して視線を下にやっていると、入口のドアがノックされた。

「お寛ぎのところ、申し訳ございません。多川です。夕食のメニューを決めていただきに参りました」

ドアの前からは、そんな声が聞こえてきた。

直美が笑い涙を拭きながら、ドアに近づき、ノブを捻った。

ドアの前に佇んでいた多川さんは、高級なレストランによくあるような臓脂の革のメニューを携えて直立不動の姿勢で立っていた。もちろん怒りつつ笑いつつといったような独特の笑顔は忘れない。

「どれにいたしましょう」

そう云って多川さんはメニューを開いた。

載っていたメニューには、庶民がちよつと触れることさえ許されないような料理が羅列されていた。

どれが無難に口に合うだろうか、とものすごく迷ったのだが、結局一番無難そうなカツレツを多川さんに頼んだ。

「じゃあ私はこの、あ、そうそれです、黒毛和牛のステーキで」

えっ、マジか。

「どうせ無料なら高そうな物を頼んだ方がいいじゃない？」

そつと僕に耳打ちする直美。そういえば、直美は母方の実家が関西の方だったな。

それから、では、と踵を返す多川さんを見送り、じゃあ僕達も下に行こうか、ということになった。

階段を下り、ロビーに向かうと、新たに二人の客が来ていた。たつた今来たところらしく、一人はきよきよと周りを見回している。珈琲色のＴシャツにジーパンといった出で立ちの、中肉中背の男性である。もう一人は……この使用人と思しき屈強そうな、全身黒スーツに黒サングラスの男性と立ち話をしていた。こちらは抹茶のレザージャケットに乳白色のスボンの小柄な男性だ。

一方、希利富さん達はあの後散り散りになったらしく、ロビーに佐伯夫婦の姿は見えない。谷口さんも食堂の入口の前で加藤野さんと立ち話をしていた。谷口さんは筆記類を一切持っていないが、おそらくあれも取材なのだろうな……。

一人ソファに残った希利富さんは新たな客二人に話し掛ける機会を、にこにこしながら待っていた。まだ出会って間もないけれども僕は、希利富さんはいいい意味で天然なのだろうなあ、と思った。

「——ここ、孔雀館の雰囲気について、どう思いますか？」

「……広々とはしていないけれど、開放感があります」

「へえ、開放感？」

「はい。……ここにいると、何だか自由でいられる気がして」

「自由、ですか」

「自由、です」

「……そうですか」

——谷口さんと加藤野さんの取材のやり取りが聞こえてきた。

こうして聞くと、谷口さんって敬語が全然似合わないな。それに比べて加藤野さんはまるで立て板に水、といった風な自然さで敬語を繰り返している……。その差が面白くて僕は心の中で苦笑した。

加藤野さん、か。

加藤野さんの、下の名前は何というのだろう。多川さんも云っていたように、加藤野さんは僕等と年齢はそんなに変わらないだろう。もしかしたら僕等よりも下かもしれないし。なら、お互い下の名前で呼ぶのがマナーってものだろう。

取材が一段落すると、僕等は谷口さん達に近づいた。

「あ、加藤野さん」

僕の言葉に加藤野さんがはい、と振り向いた。

「下の名前、教えてもらえますか？苗字だと何か気持ち悪いんで一瞬え、という風に驚いたが、すぐに顔が無表情に戻し、答えた。

「……阿音、です」

ほんのわずかに加藤野さん——阿音ちゃんの頬が赤く染まったのは、まあ僕の気のせいだろう。

「そつか。よろしく、阿音ちゃん」

僕が笑い掛けると、彼女は少し恥ずかしそうに俯いた後、ぱたぱたと食堂の周りを小走りで行ってしまった。

「……あーあ、柳人、阿音ちゃんに嫌われちゃった」

走り去っていく阿音ちゃんを見やって直美がにやにやと僕を見るが、彼女が無表情な割にとても恥ずかしがり屋なのは今ので二人共承知した。だから直美が本気で云っているのではないことはよくわかっている。

「柳人君、直美ちゃん」

と、谷口さんが僕等に近付いてきた。

「二人はさつき出来なかったことだし、皆纏めて取材させてもらえるかな？」

後ろ——ロビーの方を親指で指差す。そこには希利富さんと雑談を交わす新客二人の姿があった。やはり二人とも独特な希利富ワール

ドにハマったらしく、半ばぽかんとしていた。

これからも楽しくなっていきそうだ。

「あのね、谷口さん。さっき柳人が私の部屋でね——」

……楽しくなっていきそうだ。

第3話：宿泊客達2（後書き）

登場人物紹介に『牧村尚平』という人物をいれておいたので、お手数ですが、見直しておいて下さい。

第4話：宿泊客達3

「へえ。それじゃ谷口さんはサメを間近で見たこともあるんですか」
「ああ。あん時は大変だったな。エンジンが故障しかけて、一時はどうなるかと思ったよ。気持ちの悪いクラゲの大群がうじゃうじゃ押し寄せてきたりしてね」

「クラゲ！ それは大変でしたね。僕、昔砂浜でクラゲに刺されてからすごく苦手なんです、無理なんです、絶対やなんです、クラゲ」
「……そ、そうか。そりゃあ…大変だったな。まあ、エンジンは結局一時間くらいで治ったからよかったんだが。ネタになる話も聞けたし、いい写真も撮れたしな」

「写真？」

「あれ？谷口さんってカメラマンもやっているのかい？」

「ん？…ああ、一応な。今回は取材オンリーだからカメラは持ってきてないが……」

「やるねえ。カメラマンなんて、資格とかとるのも大変だったろう」
「いや、意外とそうでもないんだよ。まあ、なつてからはそれなりに大変なんだが」

谷口さんが僕等を集めてから約一時間。最初はただの取材だったのだが、段々座談会みたいになってきている。谷口さんも、初めは敬語を使っていたのに、わずか十分たらずで砕けた云い方に変わっていた。

今このロビーにいるのは、僕、直美、希利富さん、谷口さん、それからさつきやってきた新しい客二人だ。

まず、テーブルの右側のソファに座っている珈琲色のシャツの男性、神崎直樹さん。なんとあの有名なゲーム機、「グレイステーション」を世に送り出している超エリート会社「フィーズ」の正社員なんだそう。童顔で若々しい雰囲気を持っているから新入社員かと思っ

だが、今年で三十七だと云っていた。まあ云われてみれば確かに、優しさの中に鋭い知性、冷静さを持っていそうな隙のない発言や行動が神崎さんの振る舞いにはあった。……軽く流してしまったが、新人社員と三十七歳のベテランを見間違える僕の目って……。もう一人は、左側のソファ、つまり神崎さんの向かいに座っているおとなしめな男性、志馬良平さん。抹茶のレザージャケットが小柄な身体を包んでいる。比較のおとなしめな性格で、自己紹介とあいづち以外はあまり喋らなかった。神経質そうな表情を顔に刻んでいて、こちらからも少し話し掛けがたかった。

と――。

ガチャ――

「こんにちは」

また多川さんが新たな宿泊客二人を連れてきた。二人共直美と同じ年か少し上くらいに見える。

二人はすぐに僕等のところへやってきた。

「こんにちは、私、犬山さつきって云います。よろしくお願いします」

背は中くらい、黒髪のボブカットで、赤フレームの奥では大きめの瞳が輝いている。全体的に知的で可愛い印象を受ける。

「真民令です。よろしく――」

二人目は、どちらかと云うと長身で、ロングヘアーの金髪が目立つ。色素の薄い瞳は何だか妖艶で、吸い込まれそうな感じがした。

と、令さんと目が合った。にこっ、と微笑まれる。

ドキッ――！

急に、目の前がくらくらした。視線のやり場に困り、きよるきよると目を落ち着きなく動かす。……なまめかしいような、妖艶な美し

さがある。僕の心の奥底を見透かされたような、不思議な感じがした。ときどきしながら、軽く会釈する。もうパニック状態だ。いや、別に僕が初対面の女の人に惹かれたとか、そんな僕が軽い奴だとか浮気者だとか、そういうことじゃなくて、僕には、そう、直美がいるし……って、そうじゃない！そうじゃなくて僕は……——！

ぎゆう……！

「どうしたの？ そんなに顔赤くして」

満面の笑みで直美が聞いてくる。……額に血管を浮き出たして。直美の足が僕の足を踏み潰す。これは多分最大出力だ。……ぐりぐり。

「柳人君……顔、青いよ？」

希利富さんが心配そうに声を掛けてくれる。痛い痛い痛い！

「な、直美、その……」

ぐりぐりぐり。

「悪かった！謝るから……」

ぐりぐりぐり。

「止めて……」

ぐりぐりぐり。

てくてくと廊下を歩く。

「ここがプレイルーム。で、こっちが物置で——」

僕と直美は、さっき二階上がった階段の横の通路を抜ける。その次にあるフロア、つまりこの建物の中心である食堂を挟んでロビーと反対の位置にあるフロアが……。

「あつた。ここが『図書室』だね」

ドアのようなものは一切なく、明かりも廊下より少し明るめで、廊下からでも図書室内部がよく見えた。図書室には窓がないらしく、開放的なロビーに比べると重厚な感じがする。

ちなみに、さっきの僕の浮気（直美曰く浮気らしい……）の罰として、僕等は集合時間まで直美の行きたいところを中心に回る事となった。割合としては僕と直美で1対9くらいだろう。まあ、別にいいのだが……。

中に入る。図書室独特の匂いが僕達を包み込む。ほぼ左右対称にたくさんの本棚がずらりと並んでいた。

「すごい」

「うん。図書館並みの量だね、これは」と。

「ん？——誰じゃ？」

右脇の本棚の陰から、一人の老人がおもむろに姿を現した。茶色の紋付き袴を着た、威厳のある老人だった。

僕はすかさず挨拶した。

「はじめまして、倉掛柳人です。どうぞよろしく」

すると、老人はどうしたことがいきなり目を見開き、口をわななかせた。

「竜子？……君は竜子なのか？」

竜子？ 一体それは誰なのだ。老人は僕の肩を掴んでがくがくと揺さぶるが、僕の記憶にそんな名前はない。

「あ、あの……」

このえもいわれぬ迫力を持ったはげ老人に何と云ったものか、僕が考えあぐねていると、直美が助け船を出してくれた。

「おじいさん、彼の名前は『りゅうこ』ではなく『りゅうと』ですよ」

「何？」

ぱつ、と僕の肩から手を離すはげ老人。反動で僕は尻餅をついてしまった。

「そうか、悪いことをしたな」

直前までの錯乱が嘘のようにあっけらかんとした口調ではげ老人は云って、そのまま図書室を出ていった。ぼけているのだろうか。

「何だ、今の？」

「色々あるんじゃない？ きつと」

そうかな。僕にはぼけているようにしか見えなかったが……。

「今のは、瓦谷晋蔵様でございます」

と、図書室の入り口から低くよく通るバリトンの声が聞こえた。多川さんではないようだ。となると……。

僕達がそちらを振り向くと、一見その筋の幹部か何かに見える、黒スーツにサングラスのがたいのいい男が立っていた。身長も結構ある。

僕等が固まっているのを見て、男はまた口を開いた。

「突然、失礼致しました。私はこの館の使用人の瑚関です」

使用人、だったのか。このいかつい大男が。なんでこの館の使用人はしかめっつらな男ばかりなのだろう。阿音ちゃんがかわいそうだ……。

「そうでしたか。——あの、それでさっきのおじいさんは一体……？」

僕は気になっていたことを聞いた。

「柳人、聞き方が失礼よ」

「そんなこといったって……」

僕はいきなり肩を掴まれて揺さぶられたんだ、このくらいのことは聞く権利があると思う。

瑚関さんはちらりとこちらを一瞥し、視線を床に落として云った。

「瓦谷様は……申し上げにくいのですが、つい最近奥様を病で亡くされていまして。それから、少し心が落ち着いていないようですの

で、どうかお見逃し下さい」

「……そう、だったんですか」

その奥さんの名前が、竜子。妻の死を認めたくなくて、似た音の名前を持つ僕に、ああして必死に妻の影を見出だそうとしていたのだろうか……。

僕等は何だか申し訳ない気分になって、瑚関さんに会釈をして図書室を出た。

「こんにちはあ」

ロビーに戻ると、ちょうど多川さんが新しい客人達を連れてきていた。僕等と同じくらいの歳の一組の男女だった。

男の方は、現代の若者の代表格、今を生きるイケイケ青年のデフォルメといった感じの、ちゃらちゃらした服を纏ったひよる長い体型のイケメンだった。髪は当然のように茶髪で、ウルフカットが嫌味な程に似合っている。

「よろしくお願いします」

僕等——ロビーには僕、直美、希利富さんがいた——の姿を認めると、口の端をくいつとあげて挨拶した。

「よろしく。——君、名前は？ あ、僕は希利富っていうんだ」

早速希利富さんがイケメン男に話しかけた。

「飯田智です」

イケメン男、智は隣にいる女の子を肘で小突いた。お前も挨拶をしるという合図だろうか。

女の子は小柄で、内気そうな感じがした。正直智と一緒にいるのが

不思議なくらいだ。

女の子は眼鏡越しに僕等を見つめ、云った。

「あ、えと、河野秋菜です。よろしく願いします」
ぺこりと頭を下げる。

「さて、これで全員揃ったかな」

希利富さんが云った。

こうして孔雀館に集まったのは、僕、直美、希利富さん、谷口さん、佐伯さん、清子さん、神崎さん、志馬さん、さつきさん、令さん、瓦谷さん、智、秋菜ちゃん、多川さん、阿音ちゃん、瑚関さんの十六人になった。

五日間、楽しく過ごせるといいなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0246d/>

孔雀館の殺人

2010年10月12日05時17分発行